

戀といふつゆよりもいやはかなかるわが生うの  
 なかの夢をみしかな  
 わがこころ女え知らず彼女かが持つあさきここ  
 ろはわれ掬みもせず  
 再びは見じとさけびしくちびるの乾かむとす  
 る時のさびしさ  
 柱のみ残れる寺の壊くあとにまよふよりげにけ  
 ふはさびしき  
 いつまでを待ちなばありし日のごとく胸に泣  
 き伏し詫ぶる子を見む

詫びて来よ詫びて来よとぞむなしくも待つ  
 るしさに男死ぬべき  
 別れてのちの互ひを思ふこと無かるべきな  
 り固く誓はむ  
 ふとしては何も思はずいとあさきかりそめご  
 とに別れむとおもふ  
 斯くばかりくるしきものをなにゆゑに泣きて  
 詫びしを許さざりけむ  
 おもひやるわが生うのはてのいやはてのゆふべ  
 までをか獨りなるらむ

やうやうにこころもしづみ別れての後のあは  
 れを味はむとす  
 思ひ倦み断えみ断えずみわがいのち夜半にぞ  
 風のながるるを聴く  
 灯赤き酒のまどるもをはりけりさびしき床に  
 寝にかへるべし  
 きはみなき青わだなかにさまよへる海のひび  
 きかわれは生くなり  
 冷笑すいのち死ぬべくこちよく涙ながして  
 われ冷笑す

死ぬばかりかなしき歌をうたはましよりどこ  
 ろなく身のなりてきぬ  
 これはこのわが泣けるにはあらざらむあらめ  
 づらしや涙ながるる  
 とりとめてなにかかなしき知らねどもとすれ  
 ばなみだ頬をながるる  
 わが痛き生命のひびきただ一に冷笑にのみ生  
 き残るかも  
 わがめぐりいづれさびしくよるべなきわかき  
 いのちが数さまよへり

さびしきはさびしきかたへさまよへりこのあ  
 はれさの耐へがたきかな  
 花つみに行くがごとくにいでゆきてやがて涙  
 にぬれてかへり來ぬ  
 櫛とればこころいささか晴るるとてさびしや  
 人のけふも髪をゆふ  
 富士見えき海のあなたに春の日の安房の渚に  
 われら立てりき  
 おぼろなる春の月の夜落葉ちりかきのかげのごとくも  
 われのあゆめり

まどかけをひきてねぬれば春の夜の月はかな  
 しく窓にさまよふ  
 首たかくあげては春のそらあふぎかなしげに  
 啼く一羽の鵝鳥  
 彼はよく妻ののろけをいふ男まことやすこし  
 眼尻さがりたる  
 街なかの堀の小橋を過ぎむとしふと春の夜の  
 風に逢ひぬる  
 春の晝街をながしの三味がゆく二階の窓の黄  
 なるまどかけ

春のそらそれとも見えぬ太陽のかげのほとり  
 のうす雲のむれ  
 ひややかに梢うねに咲き満ちしらじらと朝づける  
 ほどの山ざくら花  
 咲き満てる櫻のなかのひとひらの花の落つる  
 をしみじみと見る  
 かなしめる櫻の聲のきこゆなり咲き満てる大おほ  
 樹き白ま晝ひる風もなし  
 寝ざめゐて夜半に櫻の散るをきく枕のうへの  
 さびしきいのち

海うみなかにうごける青の一點を眼にとこしへに  
 死せしむるなかれ  
 よるべなみまた懲りすまに萌えそめぬあはれ  
 やさびしこのこひごころ  
 よるべなき生命生命が對ひ居のあはれよるべ  
 なき戀に落ちむとす  
 はかなかりし戀のうちなるおもひでのすくな  
 き數を飽かずかぞふる  
 かへるべき時し來ぬるかうらやすしなつかし  
 き地つちへいざかへらなむ

知らざりきわが眼のまへに死といふなつかし  
 き母のとく待てりしを  
 をさな子のごとくひたすら流涕すふと死にな  
 むと思ひいたりて  
 海の邊に行きて立てどもなぐさます死をおも  
 へどもなほなぐさます  
 まことなり忘れりたりきいざゆかむ思ふこと  
 なしに天のあなたへ  
 根の知れぬかなしさありてなつかしくこころ  
 をひくに死にもかねたる

死をおもへば梢はなれし落葉の地にゆくより  
 なつかしきかな  
 ゆふ海の帆の上に消えしそよ風のごとくにこ  
 の世去なむとぞおもふ  
 追はるるごと驚くひまもあらなくに別れきつ  
 ひに見ざるふたりは  
 若うして傷のみしげきいのちなり蹠跟として  
 けふもあゆめる  
 然れども時を経ゆかばいつ知らずこのかなし  
 さをまた忘るべし

ふたたびはかへり來ることあらざらむさなり  
 いかでかまたかへり來む  
 ほのかなるさびしさありて身をめぐるかなし  
 みのはてにいまか來にけむ  
 思ふまま涙ながせしゆふぐれの室むろのひとり  
 石にかも似む  
 死に隣る戀のきはみのかなしみの一すぢみち  
 を歩み來しかな  
 故わかずわれら別れてむきむきにさびしきか  
 たにまよひ入りぬる

見るかぎり友の顔みな死にはてしさびしきな  
 かに獨りものをおもふ  
 おぼろ夜の停車場たい内の雑沓ざつに一すぢまじる少すく  
 女の香あり  
 疲れはてて窓をひらけばおぼろ夜の嵐のなか  
 になく蛙かはあり  
 ゆく春の軒端に見ゆるゆふぞらの青のにごり  
 に風のうごけり  
 ちやるめらの遠音や室むろにちらばれる蜜柑みかんの皮  
 の香を吐くゆふべ

うしなひし夢をさがしにかへりゆく若きいの  
ちのそのうしろかげ  
わが生命よみがへり來ぬさびしさに若くさの  
ごとくうちふるへつつ  
わが行くは海のなぎさの一すぢの白きみちな  
り盡くるを知らず  
玻璃戸漏り暮<sup>ぼ</sup>春<sup>しゅん</sup>の月の黄に匂ふ室に疲れてか  
へり來しかな  
ガラス戸にゆく春の風をききながら獨り床敷  
きともしびを消す

四月すゑ風みだれ吹くこよひなりみだれてひ  
とのこひしき夜なり  
あめつちのみどり濃<sup>こまか</sup>き日となりぬ我等きそ  
てかなしみにゆく  
また見じと思ひさだめてさりげなく靜かにひ  
とを見て別れ來ぬ  
眞晝の日そらに白みぬ春暮れて夏たちそむる  
嵐のなかに  
ただ一步踏みもたがへて西ひがしわが生<sup>な</sup>のか  
ざりとほく別れぬ

うす濁る地平のはての青に見ゆかすかに夏の  
とどろける雲  
めぐりあひやがてただちに別れけり雨ふる四  
月すゑの九日  
ゆく春の嵐のみだれ雨のみだれしづかにひと  
と別るる日なり  
かなしみの歩みゆく音のかすかなり疲れし胸  
をとほくめぐりて  
しめやかに嵐みだるるはつ夏の夜のあはれを  
寝ざめながむる

夏を迎ふおもひみだれてかきにごりつかれし  
むねは歌もうたはず  
旅人あり街の辻なる煉瓦屋の根に行き倒れ死  
にはてにける  
いつしかに春は暮れけりこころまたさびしき  
ままにはつ夏に入る  
空のあなた深きみどりのそこひよりさびしき  
時にかよふひびきあり  
あをあをと若葉萌えいづる森なかに一もと松  
の花咲きにけり



底知らず思ひ沈みて眞晝時一樹の青のたかき  
 にむかふ  
 大木の幹の片へのましろきにこぼれぬる日の  
 夏のかなしみ  
 窓ちかき水田のなかの榛の木の日<sup>はり</sup>にげに青み  
 嵐するなり  
 大木の青葉のなかに小鳥啼く細かに晝の日を  
 みだしつつ  
 とりみだし哀し<sup>かな</sup>みさけび讚嘆すあああめつち  
 に夏の來れる

生くといふ否むべからぬちからよりのがれて  
 戀にすがらむとしき  
 ひややかにことは終りき別れてき斯くあるわ  
 れをつくづくと見る  
 思ひいでてなみだはじめて頬をつたふ極り知  
 らぬわかれなりしかな  
 女ひとり棄てしばかりの驚きに眼覺めてわれ  
 のさびしさを知る  
 甲斐もなくしのびしのびにいや深にひとに戀  
 ひつつ衰へにけり

忽然と息断えしごとく夜ふかく寝ざめてひと  
 をおもひいでしかな  
 怨むまじやなにかうらみむ胸のうちのかなし  
 きこころ斯くちかひける  
 ありし夜のひとの枕に敷きたりしこのかひな  
 かも斯く瘦せにける  
 わが戀の終りゆくころとりどりに初なつの花  
 の咲きいでにけり  
 音もなく人等死にゆく音もなく大あめつちに  
 夏は來にけり

海山のよこたはるごとくおごそかにわが生く  
 とふを信せしめたまへ  
 きはみなき生命のなかのしばらくのこのさび  
 しさを感謝しまつる  
 あなさびし白晝を酒に酔ひ痴れて皐月大野の  
 麥畑をゆく  
 青草によこたはりゐてあめつちにひとりなる  
 ものの自由をおもふ  
 畑なかにふと見いでつる瘦馬の草食みるたり  
 水無月眞晝

ひややかにつひに眞白き夏花のわれ等がなか  
 にあり終りけり  
 棕櫚の樹の黄色の花のかげに立ち初夏の野を  
 とほくながむる  
 初夏の野すゑの川の濁れるにももの屍ひぐろの浮き  
 しづみ行く  
 けだものはその死處とこしへにひとに見せず  
 と聞きつたへけり  
 水無月の洪水おほみづなせる日光にっこうのなかにうたへり  
 刈少女

遠くゆきまたかへりきて初夏の樹にきこゆな  
 り眞晝日の風  
 木蔭よりなぎさに出でぬ渚より木かげに入り  
 ぬ海鳴るゆふべ  
 みじか夜のころにはじめてそひねしてももの  
 あはれを知りそめしかな  
 松咲きぬ楓もさきぬはつ夏のさびしきはなの  
 咲きそめにけり  
 郊外に友のめうとのかくれ住む家をさがして  
 麥畑をゆく

夜のほどに凋<sup>しほ</sup>みはてぬる夏草の花あり朝の瓶  
 の白さよ  
 少女子の夏のころもの襜にゐて風わたるごと  
 にうごくかなしみ  
 母となりてやがてつとめの終りたるをみな  
 顔に眼をとめて見る  
 停車場に札を買ふとき白<sup>しろ</sup>銀<sup>がね</sup>の貨<sup>か</sup>のひびきの涼  
 しき夜なり  
 夏深しかの山林のけだもののごとく生きむと  
 雲を見ておもふ

麥の穂の赤らむころとなりにけりひと棄てし  
 のちのはつ夏に入る  
 いつ知らず夏も寂しう更けそめぬほのかに合<sup>あ</sup>  
 歡<sup>ひ</sup>の花咲きにけり  
 わがこころ動くともなく青草に寢居つつ空の  
 風にしたがふ  
 夏草の延び青みゆく大<sup>おほ</sup>地<sup>つち</sup>を静かに踏みて我等  
 あゆめり  
 深草の青きがなかに立つ馬の肥えたる脚に汗  
 の湧く見ゆ

夏<sup>なつ</sup>白<sup>しろ</sup>晝<sup>ひる</sup>うすくれなるの薔<sup>さき</sup>薇<sup>び</sup>よりかすかに蜂<sup>はちまき</sup>の  
羽<sup>はね</sup>音<sup>ね</sup>きこゆる  
わが友<sup>とも</sup>の妻<sup>つま</sup>とならびて縁<sup>えん</sup>に立ち眞<sup>まこと</sup>晝<sup>ひる</sup>かへでの  
花<sup>はな</sup>をながむる  
麥<sup>あわ</sup>畑<sup>はたけ</sup>の夏<sup>なつ</sup>の白<sup>しろ</sup>晝<sup>ひる</sup>のさびしや讚<sup>たのしみ</sup>美<sup>うつくし</sup>歌<sup>うた</sup>低<sup>ひく</sup>くちび  
るに出<sup>い</sup>づ  
黄<sup>き</sup>なる麥<sup>あわ</sup>一<sup>ひと</sup>穂<sup>ほ</sup>ぬきとり手<sup>て</sup>にもちて雲<sup>くも</sup>なきもと  
の高原<sup>こうげん</sup>をゆく  
高原<sup>こうげん</sup>や青<sup>あお</sup>の一<sup>ひと</sup>樹<sup>じゆ</sup>とはてしなき眞<sup>まこと</sup>白<sup>しろ</sup>き道<sup>みち</sup>とわが  
まへに見<sup>み</sup>ゆ

麥<sup>あわ</sup>畑<sup>はたけ</sup>のなかになうごける農<sup>のう</sup>人<sup>にん</sup>を見<sup>み</sup>るつつなみだ  
しづかにくだる  
わが顔<sup>かほ</sup>もあかがねいろに色<sup>いろ</sup>づきつ高原<sup>こうげん</sup>の麥<sup>あわ</sup>は  
垂<sup>た</sup>穂<sup>ほ</sup>しにけり  
ひややかに涙<sup>なみだ</sup>はひとりながれたりこころうれ  
しく死<sup>し</sup>なむとおもふに  
われみづから死<sup>し</sup>をしたしくおもふころ誰<sup>たれ</sup>彼<sup>かれ</sup>ひ  
とのよく死<sup>し</sup>ぬるかな  
火<sup>か</sup>の山<sup>やま</sup>にけむりは断<sup>た</sup>えて雪<sup>ゆき</sup>つみぬしづかにわ  
れのいつか死<sup>し</sup>ぬらむ

渚より海見るごとく汪洋とながるる死とのまへ  
にたたずむ

もの思へばおもひのはてにつねに見ゆ死ととい  
ふもののなつかしきかな

夏白晝あるかなきかのさびしさのころのう  
へに消えがてにする

松葉散る皐月の暮の或るゆふべをんな棄てむ  
と思ひたちనికి

影のごとくこよひも家を出でにけり戸山が原  
の夕雲を見に

皐月ゆふべ梢はなれし木この花の地ちに落つる間ま  
のあまきかなしみ

ひとつひとつ足の歩みの重き日の皐月の原に  
頬ほ白鳥しろの啼く

日かげ満てる木の間まに青き草をしき梢をわた  
る晝の風見る

見てあればかすかに雲のうごくなり青草のな  
かにわれよこたはる

わがいのち空にみちゆき傾きぬあなはるかな  
りほととぎす啼く

たそがれの沼尻の水に雲うつる麥刈る鎌の音  
 もきこえ來る  
 なつかしき臯月の岡のゆふぐれの青の大樹の  
 蔭に如かめや  
 落日のひかり梢を去りにけり野すゑをとほく  
 雲のあゆめる  
 けむりありほのかに白し水無月のゆふべうら  
 がなし野羊の鳴くあり  
 わが行けばわがさびしさを吸ふに似る夏のゆ  
 ふべの地のなつかし

麥すでに刈られしあとの畑なかの徑を行きぬ  
 水無月ゆふべ  
 椅子に耐へず室をさまよひ家をいで野に行き  
 またも椅子にかへりぬ  
 野を行けば麥は黄ばみぬ街ゆけばうすき衣を  
 をんな着にけり  
 やうやうに戀ひうみそめしそのころにとりわ  
 け接吻をよくかはしける  
 強ひられて接吻するときよ戸の面には夏の白  
 晝を一樹そよがす

いちいちに女の顔の異なるを先づ第一の不思議  
とぞおもふ

六月の濁れる海をふとおもひ午後あわただし  
品川へ行く

とかくして動きいでたる船蟲の背になまぐさ  
き六月の日よ

月いまだひかりを知らず水無月のゆふべはな  
がし汐の満ち来る

海のうへの月のほとりのうす雲にほのかに見  
ゆる夏のあはれさ

少女等<sup>をとめら</sup>のかるき身ぶりを見てあればものぞか  
なしき夏のゆふべは

いささかを雨に濡れたる公園の夏の<sup>おほ</sup>大路<sup>ぢ</sup>を赤  
き傘ゆく

桐の花落ちし木の根に赤蟻の巢ありゆふべを  
雨こぼれ来ぬ

枝のはし三つほど咲けるうす紅の楓のはなに  
夕雨の見ゆ

いたづらに麥は黄ばみぬ水無月のわがさびし  
さにつゆあづからず



八月の街を行き交ふ群集ぐんじゆうの黙もくせる顔のなつか  
しきかな

とこしへに逢ふこと知らぬむきむきのこころ  
こころの寂しき歩み

あめつちに獨り生きたりあめつちに斷えみた  
えずみひとり歌へり

六七月の頃を武藏多摩川の畔なる百草山に  
送りぬ、歌四十三首

涙ぐみみやこはづれの停車場の汽車のひと一室まに  
われ入りにけり

ともすればわが蒼ざめし顔のかげ汽車のガラ  
スの戸にうつるあり

雨白く木の間につぶる高原を走れる汽車の窓  
によりそふ

水無月の山越え來ればをちこちの木間に白  
く栗の咲く見ゆ

とびとびに落葉せしごとわが胸にさびしさ散  
りぬほほ頬ほほ白鳥うの啼く

啼きそめしひとつにつれてをちこちの山の月  
夜に梟の啼く

たそがれのわが眼のまへになつかしく木の葉  
 そよげり梟のなく  
 夕山の木の間にいつか入りも来ぬさだかに物  
 をおもふとなしに  
 あをばといふ山の鳥啼くはじめ無く終りを知  
 らぬさびしき音なり  
 わがこころ沈み来ぬれば火の山のけむりの影  
 をつねにやどしぬ  
 檜の林松のはやしの奥ふかくちひさき路にし  
 たがひて行く

青海のうねりのごとく起き伏せる岡の國あり  
 ほととぎす行く  
 わが死にしのちの静けき斯る日にかく頬白鳥  
 の啼きつづくらむ  
 紫陽花あぢきかのその水いろのかなしみの滴したたるゆふべ  
 蝸かまかなのなく  
 煙青きたばこを持ちて家を出で林に入りぬ雨  
 後の雫す  
 拾ひつるうす赤らみし梅の實に木の間ゆきつ  
 つ齒をあてにけり

なたはらの木に頬白鳥の啼けるありこころ恍  
 たり眞晝野を見る  
 日を沿びて野すゑにとほく低く見ゆ涙をさそ  
 ふ水無月の山  
 松林山をうづめて静まりぬとほくも風の消え  
 ゆけるととき  
 眞晝野や風のなかなるほのかなる遠き杜鵑の  
 聲きこえ来る  
 梅雨晴の午後のくもりの天地のつかれしなか  
 にほととぎす啼く

山に来てほのかにおもふたそがれの街にのこ  
 せしわが靴の音  
 或るゆふべ思ひがけなくたづね來しさびしき  
 友をつくづくと見る  
 幹白く木の葉青かる林間の明るきなかに歩み  
 入りにき  
 わが行けば木々の動くがごとく見ゆしづかな  
 る日の青き林よ  
 かなしめる獣のごとくさまよひぬ林は深し日  
 はさ青なり

はてしなくあまたの岡の起き伏せり眼に日光  
 の白く満つかな  
 別るべくなりてわかれし後の日のこのさびし  
 さをいかに追ふべき  
 棄て去りしのちのたよりをさまざまに思ひつ  
 くりて夜々をなぐさむ  
 ゆめみしはいづれも知らぬ人なりき寝ざめさ  
 びしく君に涙す  
 あるときはありのすさみに憎かりき忘れが  
 たくなりし歌かな

遠くよりさやさや雨のあゆみ来て過ぎゆく夜  
 半を寝ざめてありけり  
 ゆくりなくとあるゆふべに見いでけり合歡なぐさむの  
 こずゑの一ふさの花  
 きはみなき旅の途なるひとりぞとふとなつか  
 しく思ひいたりぬ  
 六月の山のゆふべに雨はれぬ木の間になし  
 日のながれたる  
 ゆふぐれの風ながれたる木の間ゆきさやかに  
 ひとを思ひいでしかな

ゆふ雨のなかにほのかに風の見ゆ白夏花のそ  
 ぼ濡れて咲く  
 はるばると一すぢ白き高原のみちを行きつつ  
 夏の日を見る  
 放たれし悲哀のごとく野に走り林にはしる七  
 月のかせ  
 かなしきは夜のころもに更ふる時おもひいづ  
 るがつねとなりぬる  
 鋭くもわかき女を責めたりきかなしかりにし  
 わがいのちかな

七月の山の間日光はあをうよどめり飛ぶつ  
 ばめあり  
 暈帯びて日は空にあり山々に風青暗しほとと  
 ぎす啼く  
 生くことのものうくなりしみなもとに時にお  
 もひのたどりゆくあり  
 うち断えて杜鵑を聞かずうす青く松の梢に實  
 の満ちにけり  
 わがこころ静かなる時につねに見ゆる死とい  
 ふものなつかしきかな



## 自序

廿歳頃より詠んだ歌の中から一千首を抜き、一卷に輯めて『別離』と名づけ、今度出版することにした。昨日までの自己に深く別れ去らうとするところに外ならぬ。

先に著した『獨り歌へる』の序文に私は、私の歌の一首一首は私の命のあゆみの一步一步であると書いておいた。また、一步あゆんでは小さな墓を一つ築いて來てゐる様なものであるとも書いておいた。それらの歌が背後につづいて居ることは現在の私にとつて、可懐しくもまた少なからぬ苦痛であり負債である。如何かしてそれらと絶縁したいといふ念願からそれを一まとめにして留めておかうとするのである。然うして全然過去から脱却して、自由な、解放された身になつて今まで知らなかつた新たな自己に親しんで

行き度いとおもふ。

また、昨年あたりで私の或る一期の生活は殆んど名残なく終りを告げて居る。そして丁度昨年は人生の半ばといふ廿五歳であつた。それやこれや、この春この『別離』を出版しておくのは甚だ適當なことであると私は歡んで居る。本書の装幀一切は石井柏亭氏を煩はした。寫眞は一昨年の初夏に撮つたものである。この一卷に收められた歌の時期の中間に位するものなので挿入しておいた。

歌の掲載の順序は歌の出來た時の順序に従うた。左様なら、過ぎ行くものよ。これを期として我等はもう永久に逢ふまい。

明治四十三年四月六日

著者

吾<sup>われ</sup>木<sup>も</sup>香<sup>かう</sup>すすきかるかや秋<sup>あき</sup>くさのさびしききは  
み君<sup>きみ</sup>におくらむ  
いま眠<sup>ね</sup>ぢむ寂<sup>さび</sup>しき腫<sup>はれ</sup>明<sup>あ</sup>らかに君は何をかうつ  
したりけむ(途中大阪にかれは逝きぬ)  
短<sup>みづか</sup>かりし君がい<sup>き</sup>のちのなかに見ゆきはまり知  
らぬ清<sup>しみず</sup>きさびしさ

### 上卷

自明治三十七年四月  
至同四十一年三月



## 旅の歌より、三首

南國の港のほこり遊君の美なるを見よと帆は  
さんざめく

草ふかき富士の裾野をゆく汽車のその食堂の  
朝の葡萄酒

晩夏の光しづめる東京を先づ停車場に見たる  
寂しさ

○

こは笑止八重山ざくら幾人の女のなかに酔ひ  
泣く男

酔ひはてては世に憎きもの一も無しほとほと  
われもまたありやなし

女ありき、われと共に安房の渚に渡りぬ。わ  
れその傍らにありて夜も晝も断えず歌ふ。  
明治四十年早春。

戀ふる子等かなしき旅に出づる日の船をかこ  
みて海鳥の啼く

山ねむる山のふもとに海ねむるかなしき春の  
國を旅ゆく

岡を越え眞白き春の海邊のみちをはしれりふ  
 たつの人車  
 砂濱の丘をくだりて木の間ゆくひとのうしろ  
 を見て涙しぬ  
 このごろの寂しきひとに強ひむとて葡萄の酒  
 をもとめ來にけり  
 かなしげに星か降るらむ戀ふる子等こよひは  
 じめて添寝しにける  
 ものおほく言はずあちゆきこちらゆきふたり  
 は哀し具をひろへる

渚ちかく白鳥群れて啼ける日の君がかほより  
 寂しきはなし  
 浪の寄る眞黒き巖にひとり居て春のゆふべの  
 暮れゆくを見る  
 海岸の松青き村はうらがなし君にすすめむ葡  
 萄酒の無し  
 わがうたふかなしき歌やきこえけむゆふべ渚  
 に君も出で來ぬ  
 くちづけの終りしあとのよこ顔にうちむかふ  
 晝の寂しかりけり

いかなれば戀のはじめに斯くばかり寂しきこ  
 とをおもひたまふぞ  
 海女の群からすのごときなかにゐて貝を買ふ  
 なりわが戀人は  
 渚なる木の間ゆきゆき摘みためし君とわが手  
 の四五の菜の花(以上)

○

黒髪に毒あるかをりしとしとにそそぎて侍れ  
 花ちるゆふべ

悲し悲し火をも啖ふと戀ひくるひ斯くやすら  
 かに抱かれむこと  
 床に馴れ羽おとろへし白鳥のかなしむごとく  
 けふも添寝す  
 この手紙赤き切手をはるにさへこころときめ  
 く哀しきゆふべ  
 添臥に馴れしふたりの言も無うかなしむ家に  
 櫻咲くなり  
 汪洋と濁れる河のひたながれ流るるを見て眼  
 をひらき得ず

われ死なばねがはくはあとに一點いっぴんのかげもと  
 どめで日にいたりてむ  
 むしろわれけものをねがふ思ふまま地ちの上へ這  
 ひ得るちからをねがふ  
 かなしみは死にゆきただち神にゆきただひと  
 すぢに久遠くわんに走る

## 下卷

自明治四十一年四月  
 至同四十三年一月

いづくよりいづくへ行くや大空の白雲のごと  
 逝きし君はも（三首獨歩氏を悼む）  
 仰ぎみる御そら庭の樹あめつちの冷ひやかなりや  
 君はいますさず  
 君ゆけばむらがりたちて静けさの盡くるを知  
 らず君追ふとおもふ

六七月の頃武蔵國多摩川の畔なる百草山に  
て、二首

松林風の斷ゆればわがこころふるへておもふ  
黒髪の香を

午後晴れぬ煙草のあまさしとしとに胸に浸む  
日ほととぎす啼く

○

秋風吹くつかれて獨りたそがれの露臺にのぼ  
り空見てあれば(某新聞社樓上)

いつ知らず重ねて胸に置きたりし双のわが手  
を見れば涙落つ  
このごろの迷ひ亂れにありわびて寂しやわれ  
に歸らむとする  
しづやかに大天地に傾きて命かなしき秋は來  
にけり  
まれまれに言ひし怨言のはしはしのあはれな  
りしを思ひ出づる日  
物をおもふ電車待つとて十月の街の柳のかけ  
に立ちつつ

公園の木草かすかに黄に染みぬ馴れしベンチ  
 に今日もいこへる  
 松蟲鳴きそよ風わたるたそがれの小野の木の  
 間を過ぎなやむかな  
 日は黄なり斑々として十月の風みだれたる木  
 の間に人に  
 栗の樹のこずゑに栗のなるごとき寂しき戀を  
 我等遂げぬる  
 たはむれのやうに握りし友の手の離しがたか  
 り友の眼を見る

髪ながく垂れて額の蒼を掩ふ無言よ君にくち  
 づけてゐむ  
 野には來ぬころすこしもなぐさまず木の間  
 を行きつ草に坐りつ  
 ふるさとのお秀が墓に草枯れむ海にむかへる  
 彼の岡の上  
 波白く断えず起れる新秋のとほき渚に行かむ  
 とぞおもふ  
 けふ別れまた逢ふこともあるまじきをんなの  
 髪をしみじみと見る

ころろ永く待つといふなりころろ永く待つと  
 いふなりかなしき女をんな  
 冷やかに部屋にながるる秋の夜の風のなかな  
 り我等は黙もす  
 ころろ斯く荒すさみはてぬるわが顔のその唇をお  
 もふに耐へす  
 秋の白晝ひる風呂にひたりて疲れたる身はおもふ  
 なり女をんなのことを  
 破れたるたたみのうへに一脚いっさやくの寝椅子を置き  
 つ秋の夜を寝ねる

うまき肉たうべて腹の満ちぬれば壁にもたれ  
 てゐねぶりをする  
 酔ふもまたなにかはせむすべからく酒を棄  
 てむとおもひ立ちにき  
 二階より更けて階は子こをくだるとき深くも秋の  
 夜を感じぬる  
 おもはるるなさけに馴れて驕りたるひとのこ  
 ころを遠くながむる  
 手をとりにて心いささかしづまりぬもの言へば  
 彌い寂やしさの増す

秋のあさうなじに薄く白粉おしろひの残れるを見つつ  
 別れかへりぬ  
 わがちさき帽のうへより溢れ来る秋のひかり  
 に血は安からず  
 健やかに身はこころよく饑ゑてあり野菊のな  
 かに目を浴びて臥す  
 四階よりのぞめば街の古濠ふるぼりにゆふべ濁りて潮  
 のさし来る  
 靴屋あり靴をつくろふ鍛冶屋ありくろがねを  
 打つ秋の日の街

くちもとのいふやうもなく愛らしきこの少年  
 にくちづけをする  
 わかくさの山の麓は落葉せむいまか静かに鹿  
 の歩まむ  
 秋風吹き日かげさやかに流れたる窓にふたり  
 は旅をおもへり  
 或時はなみだぐみつつありし日の寂しき戀に  
 かへらむとする  
 はてしなくひろき林に行かしめよしばし落葉  
 の音を断たしめよ



彼のとほき林に棲める獣はかなしめる日の無  
 きかあらしか  
 われ死なば林の地を掘りかへしひとに知らゆ  
 な其處に埋めよ  
 林には一鳥啼かず木のかげにたふれて秋に身  
 を浸し居り  
 涙落つまぬかれがたき運命のもとにしづかに  
 眼を瞑ぢむとし  
 棄て去りしわが女をばさまざまに人等啄むさ  
 まの眼に見ゆ

かへり来よ櫻紅葉の散るころぞわがたましひ  
 よ夙く歸り来よ  
 しかれども一度戀に沈み來しこのかなしさを  
 いかに葬らむ  
 さまざまの女の群に入りそめぬ戀に追はれし  
 漂泊人は  
 ことごとく落葉しはてし大木にこよひ初めて  
 風のきこゆる  
 晴れわたる空より樹より散りきたるああ落葉  
 のさまのたのしさ

妻つれてうまれし國の上野に友はかへりぬ秋  
風吹く日

木々のかげまだらに落ちてわが肩に秋の日重  
し林に死なむ

彼の國の清教徒よりなほきよく林に入りて棲  
まむともおもふ

ありつる日死をおもふことしげかりし身は茫  
然と落葉を見る

山蔭に吸はれしごとく四五の村巢くへる秋の  
國に來にけり(以下伴二と旅に出でて)

名も知らぬ河のほとりにめぐり來ぬけむり流  
るる秋の夕に

白々とゆふべの河の光るありたひらの國の秋  
の木の間

雲うすく空に流れて凧ぎたる日林の奥に落葉  
断えせず

落葉樹まばらに立てる林間の地平にひくし遠  
山の見ゆ

身を起しまた忍びかに歩みいでぬ落葉ばやし  
の奥の木の間を

手ふるればはららはらと落葉す林のおくの  
一もと稚木

林間の落葉を踏みつ樹に倚りつ涙かきたれな  
にを歌ふぞ

ながながと地上に身をば横へぬ夕陽の前の落  
葉林に

かきあつめ白晝落葉に火をやりぬ林の奥へ白  
き烟す

ひややかに落葉林をつらぬきて鐵路走れり限  
りを知らず

うす甘き煙草の毒に酔ひはてぬ黄なる林の奥  
の一人は(以上)

軒下の濠のひびきと硝子戸のゆふ風の音と椅  
子に痛める

夕暮のそよ風のなかにいたみ出づ倦みし額に  
浮ける蒼さは

新しき鶯ペンに代へしゆふぐれの机のうへに  
満てるかなしみ

ゆふぐれは蒼みて来りまた去りぬ窓邊の椅子  
にわれの埋るる

ゆふ日さし窓の硝子は赤々と風に鳴るなり長  
 椅子に寝る  
 數知れぬ女の肌おほに溺れたるこのわかき友は酒  
 を好まず  
 打ち連れて活動寫眞觀みに行きし女のあとに灯  
 をともすなり  
 果實くだものをあまたたうべし夕まぐれ飯いひの白きを見  
 るは眼痛めいたし  
 家々にかこまれはてしわが部屋の暗きこもり  
 ストローヴを焚く

悲しげに赤き火を見せゆふ闇の椅子に人あり  
 煙草は匂ふ  
 黒髪の匂ふより哀かなしつかれたる身にゆふぐれ  
 のいどみ寄るさま  
 海に沿ひ山のかげなるみだらなる温泉町おんせんまちに冬  
 は來りぬ  
 涙たたへ若かる友はかなしみぬ見よわが戀は  
 斯くもまつたし  
 容れがたし一度ひとたびわれを離れたる汝なれがこころは  
 また容れがたし

白々と鷗まひ出づる山かげの冷たき海をおも  
 ひ出でけり  
 離れたる愛のかへるを待つごときこの寂しさ  
 の呪ふべきかな  
 この河の流れて海に入らむさま蘆の間におも  
 ひ悲しむ  
 灯をともしむとする横顔の友の疲れは闇に浮  
 き出づ  
 命なりそのくちびるを愛せよと消息に書き涙  
 落しぬ

衰へしひとの額をかきいだき接吻せむとすれ  
 ばあはれ眼を瞑づ  
 かき抱けば胸に沈みてよよと泣くそのかみの  
 日の少女のごとく  
 半島の國の端なる山かげのちさき港に帆を下  
 しけり (以下旅に出てて)  
 枝垂れ咲けり暗緑色の浪まるぶ海の岸なる老  
 樹の椿  
 青き白き濤のみだれにうちまじり磯に一羽の  
 小鳥啼くあり

ひろびろと光れる磯に獨りゐて貝ひらふ手に  
 眺め入りぬる  
 越え歩く海にうかべる半島の冬のうす黄の岡  
 より岡へ  
 旅人は海の岸なる山かげのちひさき町をいま  
 過ぎるなり  
 海岸のちひさき町の生活の旅人の眼にうつる  
 かなしさ  
 男あり渚に船をつくろへり背にせまりて海の  
 かがやく

ゆふ日赤き漁師町行きみだれたる言葉のなか  
 に入るをよろこぶ  
 風風ぎぬ夕陽赤き灣内の片すみにて帆をお  
 ろす船  
 わが船は岬に沿へり海青しこの伊豆の國に雪  
 のつもれる  
 夕陽の赤くしたたる光線にうかび出でたり岬  
 の街は  
 春白晝ここの港に寄りもせず岬を過ぎて行く  
 船のあり(以上)



## 自序

昨年の春出版した「別離」以後の作約五百首をあつめてこの一冊を編んだ。昨一年間に於けるわが生活の陰影である。透徹せざる著者の生きやうは、その陰影の上に同じく痛ましき動搖と朦朧とを投げて居る。あての無い悔恨は、これら自身の作品に對する時、ことに烈しく著者の心を刺す。我等、眞に生きざる可からざるを、また繰返して思ふ。

明治四十四年九月

若山牧水



静やかにさびしき我の天地に見えきたるとき  
 涙さしぐむ  
 日もうらさびし  
 わが足のつきたる土もうらさびし彼の蒼空の  
 戀しかりけり  
 海底に眼のなき魚の棲むといふ眼の無き魚の

自明治四十三年一月  
 至同 四十四年五月

菅山 舟木

死にがたしわれみづからのこの生命食み残し  
 居りまだ死に難し  
 光なきいのちのありてあめつちに生くといふ  
 ことのいかに寂しき  
 手を觸れむことも恐ろしわがいのち光うしな  
 ひ生を貪る  
 たぽたぽと樽に満ちたる酒は鳴るさびしき心  
 うちつれて鳴る  
 寂しさは屍に似たるわが家にこの酒樽はおく  
 られて來ぬ

この樽の終のしづくの落ちむ時この部屋いか  
 にさびしかるべき  
 酒樽をかかへて耳のほとりにて音をさせつつ  
 をどるあはれさ  
 おとろへしわが神経にうちひびきゆふべしら  
 じら雪ふりいでぬ  
 ゆふぐれの雪降るまへのあたたかさ街のはづ  
 れの群集の往來  
 ひとしきりあはく雪ふり月照りぬ水のほとり  
 の落葉の木立

白粉のこぼれむとする横顔に血の潮さしきたり  
 たそがれにけり  
 窓かけのすこしあきたるすきまより夜の雪見  
 ゆねむげなる女  
 投げかけし女ひとりのたましひをあはれから  
 だを抱きなやめり  
 酔ひはてて小鳥のごとく少女をとめ等はかろく林檎  
 を投げかはすなり  
 のびのびと酒の匂ひにうちひたり乳に手を置  
 きねむれる少女をとめ

一時の鐘とほくよりひびきいや深に三月ごよみ風吹  
 く夜のなやむかな  
 枕より離れしときのしづかなる女のひとみわ  
 れに對むかへり  
 倦みはてしわれのいのちにまつはりつ断えな  
 むとして匂ふ黒髪  
 みさをなきをんなのむれにうちまじりなみだ  
 ながしてわがうたふ歌  
 かなしげに疲れはてつつわれいだく匂へる腕  
 ゆいかに逃れむ

あわただしく汝<sup>なむぢ</sup>をおもひゆふぐれの窓かけの  
 かげに涙ぐみぬる  
 玉のごときなむぢが住める安房<sup>あは</sup>のなぎさ春の  
 ゆふべをおもひかなしむ  
 うれひつつ歩めば赤き上靴のしづかに鳴れり  
 二階のゆふべ  
 數知れぬをんなとちぎり色白のこのわかき友  
 は酒をこのます  
 身も投げつころもなげつものをおもふゆふ  
 べかへさの電車の隅に

相寄りつ離れつ憎みなつかしき若きをとこの  
 むれのどよめく  
 夕まぐれ酒の匂ふにひしひしとむくろに似た  
 る骨ひびき出づ  
 沈<sup>ちん</sup>丁<sup>ちやう</sup>花<sup>け</sup>青<sup>せい</sup>みかをれりすさみゆく若きいのちの  
 なつかしきかな  
 われ歌をうたひくらしして死にゆかむ死にゆか  
 むとぞ涙を流す  
 獸あり混沌として黄に濁る世界のはてをした  
 ひ歩める

なほ耐ふるわれの身體からだをつらにくみ骨もとけ  
 よと酒をむさぼる  
 酒すすればわが健かの身のおくにあはれいた  
 ましき寂しさの燃ゆ  
 あな寂し酒のしづくを火におとせこの夕暮の  
 部屋匂はせむ  
 酒のためわれ若うして死にもせば友よいかに  
 かあはれならまし  
 歸りくればわが下宿屋のゆふぐれの長き二階  
 に灯のかげもなし

書き終へしこの消息きせきのあとを追ひさびしき心  
 しきりにおこる  
 光線のごとく明るくこまやかにこころ衰へ人  
 を厭へり  
 おとろへの極みに來けむ眼に満てるあらゆる  
 人の憎し醜し  
 蹠あしと街をあゆめば大ぞらの闇のそこひに春  
 の月出づ  
 深々と赤き灯よどむいろ街を酔ふて走れば足  
 音がする

ひとつ飲めばはやくも紅く染まる頬の友もわ  
 が眼にさびしかりけり  
 まれまれに相見る友のいづくやらむさびしげ  
 なるに心とらるる  
 齒を痛み泣けば背負ひてわが母は峽おびの小川に  
 魚を釣りにき  
 父おほく家に在らざり夕さればはやく戸を閉ま  
 し母と寝にける  
 ふるさとは山のおくなる山なりきうら若き母  
 の乳にすがりき

ふるさとの山の五月ごくわつの杉の木に斧振る友のお  
 もかげの見ゆ  
 おもひやるかのうす青き峽のおくにわれのう  
 まれし朝のさびしさ  
 親も見じ姉もいとほしふるさとにただ檳榔樹びらうじゆ  
 を見にかへりたや  
 衰へてひとの來るべき野にあらず少女等群れ  
 て摘草をする(五首戸山が原にて)  
 めづらかに野に出で來ればいちはやく日光に  
 酔ひつかれはてける

つみ草のそのうしろかげむらさきの匂へる衣  
 のかなしかりけり  
 梢<sup>つれ</sup>あをむ木蔭にすわりつみ草のとほき少女を  
 見やるさびしさ  
 かの星に人の棲むとはまことにや晴れたる空  
 の寂し暮れゆく  
 ふと寄れば昔なじみの或るをんななほ三味ひ  
 きて此<sup>こ</sup>家に住みける  
 見詰めてふけたまひしと女いふみづからの  
 老はいかに知るらむ

三味をおくをんなのまへの夜の白さわが古着  
 物わびしかりけり  
 はや既に浸<sup>ひ</sup>みをへけむわが五體酒をのめども  
 酔ふことをせず  
 ややしばしわれの寂しき眸<sup>まぶ</sup>に浮き彗<sup>はう</sup>星見ゆ青  
 く朝見ゆ  
 風光り櫻みだれて顔に散るこころ汗ばみ夏を  
 おもへる  
 いちはやく四月の街に青く匂ふ夏帽子をばう  
 ちかづきけり

かのをとめ顔の醜し多摩川にわか草つみに行  
 かむとさそふ  
 われ二十六歳歌をつくりて飯に代ふ世にもわ  
 びしきなりはひをする  
 小田卷の花のむらさき散りてありまれにかへ  
 れるわが部屋の窓  
 頬をすりて雌雄の啼くなりたそがれの花の散  
 りたる櫻にすずめ  
 わが歌を見むひとわれのおとろへて酒飲むか  
 ほを見ることなかれ

徳利取り振ればかすかに酒が鳴るわが酔ざめ  
 のつらのみにくさ  
 月の夜半酔ひざめの身のとぼとぼとあゆめる  
 街の夏の木の影  
 あと月のみそかの夜より亂酔の断えし日もな  
 し寝ざめにおもふ  
 風ひかり桃のはなびら椎の樹の落葉とまじり  
 庭に散りくる  
 いねもせず白き夜着きて灯も消さずくちすさ  
 む歌のさびしかりけり



初夏の木々あをみゆく東京を見にのぼり來よ  
 海も凧ぎつらむ(友へ)  
 別れたるをんなが縫ひしものなりき古き羽織  
 を盗まれにけり  
 貧しければ心も暗し蟲けらの在り甲斐もなき  
 生きやうをする  
 やうやくに待ちえしごとくわがころあまえ  
 てありぬ病みそめし身に  
 濁りたるままにころは凧ぎはてて醫師の寢  
 臺によこたはるかな

命より摘みいだすべき一すぢのさびしさもな  
 しかなしさも無し  
 思ひいでて寢ぬ夜しもなきあはれさの二年<sup>ふたとせ</sup>を  
 經てなほつづくらむ  
 なほもかく飽くことしらずひとを思ふわれの  
 ころのあはれなるかな  
 ふらふらと野にまよひ來ればいつのまにさび  
 しや麥のいろづきにけむ  
 はらみたる黒き小犬の媚びもつれ歩みもかね  
 つ青き草原

いつ知らず摘みし蓬よもぎの青き香のゆびにのこれ  
 り停車場に入る  
 摘草のほひ残れるゆびさきをあらひて居れ  
 ば野に月の出づ  
 あを草に降おりくる露をなつかしみ大野に居れ  
 ばまろき月出づ  
 わがいのち盡きなばなむぢまた死なむわが歌  
 よ汝なをあはれに思ふ  
 花見ればはなのかはゆし摘みてまし摘むとも  
 なにのなぐさめにせむ

六月中旬、甲州の山奥なる某温泉に遊ぶ、當時  
 の歌二十二首。

雲まよふ山の麓のしづけさをしたひて旅に出  
 でぬ水み無な月つき  
 たひらなる武藏むさしの國のふちにある夏の山邊に  
 汽車の近づく  
 絲に似て白く盡きざる路の見ゆむかひの山の  
 夕風のなか  
 辻々に山のせまりて甲斐のくに甲府の町は寂  
 し夏の日

初夏の雲のなかなる山の國甲斐の畑に麥刈る  
 子等よ  
 雲おもくかかれる山のふもと邊に水無月松の  
 散り散りに立つ  
 遠山のうすむらさきの山の裾雲より出でて麥  
 の穂に消ゆ  
 山あひのちさき停車場ややしばし汽車のとき  
 れば雲降りきたる  
 停車場の汽車のまどなる眼にさびし山邊の畑  
 に麥刈れる子等

山々のせまりしあひに流れたる河といふもの  
 の寂しくあるかな  
 大河の岸のほとりの砂めく身のさびしさに思  
 ひいたりぬ  
 山越えて入りし古驛の霧のおくに電燈の見ゆ  
 人の聲きこゆ  
 わが對ふあを高山の峯越しにけふもゆたかに  
 白雲の湧く  
 おほどかに夕日にむかふ青山のたかき姿を見  
 ればたふとし

木の葉みな風にそよぎて裏がへる青山を人の  
 行けるさびしさ  
 しらじらとほき麓をながれたる小川ながめ  
 て夕山を越ゆ  
 青巖のかげのしぶきに濡れながら啼ける河鹿  
 を見出でしさびしさ  
 わが小枝子思ひいづればふくみたる酒のには  
 ひの寂しくあるかな  
 泣きながら桑の實を摘み食うべつつ母を呼ぶ  
 子を夕畑に見つ

酸くあまき甲斐の村々の酒を飲み富士のふも  
 との山越えありく  
 ゆふぐれの河にむかへばすすみたるわれのい  
 のちのいちじろきかな  
 かへるさにこころづきたる掌のうちの河原の  
 石の棄てられぬかな

——旅の歌をばり——

めづらかに明るき心さしきたりたまゆらにし  
 て消えゆきしかな

このままに衰へゆかばこの酒のほひもやが  
 て身に耐へぬらむ  
 さやりなく青蔦の葉のもつれあふそのよろこ  
 びを夜の床にする  
 高空に雲のうかべるあめつちのありのすさび  
 も身にさびしけれ  
 枕敷きすひ終りたるひとすぢのけむりにここ  
 ろなぐさめて寝む  
 ふるさとの濱に寄るなる白波の繪葉書をもて  
 かへり來よとふ

夏の夜やこころ少女のひとりだにわがものな  
 らぬかなしみをする  
 心ぬけし頬をかすかにながれたるこの涙こそ  
 わりなかりけれ  
 わだつみのそこのごとくにこころ風ぐ縦の大おほ  
 樹きにむかふゆふぐれ  
 すさみたるこころのひまに濡れて見ゆ木の根  
 に散れる青石かわれ  
 この腫しばしを酒に離れなばもとの清さに澄  
 みやかへらむ

あかつきの寢覺の床をひたしたるさびしさの  
 そこに眼をひらくなり  
 この鼻のひくきが玉にきすぞかし肌のきよさ  
 よよく睡るひと  
 あはれまたねむりたまふかたまたまに逢ふ夜  
 はわきて短きものを  
 なげやりのあまきつかれにうち浸り生きて甲  
 斐あるけふを讃へむ  
 衰ふる夏のあはれとなげやりのこころのすゑ  
 と相對ふかな

涙ややにうかび出づればせきあげしかなしみ  
 は早や消えて影なし  
 影さへもあるかなきかにうちひそみわがいの  
 ちいま秋を迎ふる  
 いひがひなきわれみづからへつらあてかとす  
 れば死しにに親しまむとす  
 君住ますなりしみやこの晩夏の市街まちの電車に  
 けふも我が乗る  
 三味をひく手もとのふりのいかなればこよひ  
 はかくも身にししむらむ

かりそめの一夜の妻のなさけさへやむごとも  
 なし身にしみわたる  
 蟬とりの兒等にをりをり行き逢ひぬ秋のはじ  
 めの風明き町  
 をみなへしをみなへし汝をうちみればさやかに  
 秋に身のひたるかな  
 青やかに夜のふけゆけばをちかたに松蟲きこ  
 ゆ馬追も啼く  
 蟲なけばやめばこころのとりどりにあはれな  
 ることしげきよひかな

洪水にあまたの人の死にしことかかはりもな  
 しものおもひする  
 またさらにこぞの秋まで知らざりしいのちの  
 寂に行きあへるかな

九月初めより十一月半ばまで信濃國淺間山の  
 麓に遊べり、歌九十六首。

名も知らぬ山のふもと邊過ぎむとし秋草のは  
 なを摘みめぐるかな  
 朴の木に秋の風吹く白樺に秋かせぞふく山を  
 あゆめば

城あとの落葉に似たる公園に入る旅人の夏帽  
 子かな（小諸懐古園にて）  
 秋風や松の林の出はづれに青アカシヤの實が  
 吹かれ居る  
 秋晴のふもとをしろき雲ゆけり風の浅間の寂  
 しくあるかな  
 浅間山山鳴きこゆわがあぐる瞳のおもさ海に  
 かも似む  
 わがこころ寂しき骸からを残しつつ高嶺の雲に行  
 きてあそべる

酒飲めばこころ和なみてなみだのみかなしく頬  
 をながるるは何ぞ  
 秋かせの吹きしく山邊夕日さし白樺のみき雪  
 のごときかな  
 なにごとも思ふべきなし秋風の黄なる山邊に  
 胡桃くるみをあさる  
 胡桃とりつかれて草に寝てあれば赤とんぼ等  
 が來てものをいふ  
 かたはらに秋ぐさの花かたるらくほろびしも  
 のはなつかしきかな



白玉の齒にしみとほる秋の夜の酒はしづかに  
 飲むべかりけり  
 あはれ見よまたもころはくるしみをのがれ  
 むとして歌にあまゆる  
 残りなくおのが命を投げかけて來し旅なれば  
 障りあらずな  
 旅人は松の根がたに落葉めき身をよこたへぬ  
 秋風の吹く  
 かなしみに驕りおごりてつかれ來ぬ秋草のな  
 かに身を投ぐるかな

小諸なる醫師の家の二階より見たる淺間の姿  
 のさびしさ  
 秋風のそら晴れぬれば千曲川白き河原に出て  
 あそぶかな  
 薄暗きころ火に似て煽り立つ野山もうごき  
 秋かせの吹く  
 顔ぢゆうを口となしつつ雙手して赤き林檎を  
 噛めば悲しも  
 秋くさの花のさびしくみだれたる微風のなか  
 のわれの横顔

わがこころ碧玉へきぎよくとなり日の下もとに曇りも帯びず  
 歎く時あり  
 秋くさのはなよりもなほおとろへしわれのい  
 のちのなつかしきかな  
 われになほこの美しき戀人のあるといふこと  
 がかなしかりけり  
 松山の秋の峽間はさまに降り來れば水の音ねほそしせ  
 きれいの飛ぶ  
 うちしのび都を落つる若人に朝の市街ちまたは青か  
 りしかな

身もほそく銀座通りの木の蔭に人目さけつつ  
 旅をおもひき  
 絶望のきはみに咲ける一もとの空いろの花に  
 酔ひて死ぬべし  
 黄ばみたる廣葉がくれの幹をよぢ朴ほほの實をと  
 る秋かせのなか  
 かへり來て家の背戸口わが袖の落葉か松まつの葉を  
 はらふゆふぐれ  
 せきあげてあからさまにも小石めく涙わりな  
 き小夜さよもこそあれ

濁り江のうすむらさきの水草のここにも咲け  
 ば哀<sup>かな</sup>しわが生<sup>な</sup>は  
 衰ふる夏の日ざしにしたしみて晝も咲くとや  
 野の月見草  
 長月のすゑともなればほろほろと落つる木の  
 葉のなつかしきかな  
 沈みゆく暗きところにさやるなく家をかこみ  
 てすさぶ秋風  
 汝が弾ける絲のしらべにさそはれてひたおも  
 ふなり小枝子がことを

わが母の涙のうちうつらむわれの姿を思  
 ひ出づるも  
 おほかたの彼の死顔ぞ眼にうかぶころうれ  
 しく死をおもふ時  
 憫れめとなほし強ふるかつゆに似て衰へし子  
 は肺を病むてふ  
 戀人よわれらひとしくおとろへて尙ほ生くこ  
 とを如何におもふぞ  
 ころろややむかしの秋にかへれるか寢覺うれ  
 しき夜もまじりきぬ

ほろほろと啼くは山鳩さしぐめるひとみに青  
 し木の間松の葉  
 黄なる山まれに聞ゆる落葉はかなしき酒の香  
 に似たるかな  
 むらさきの暗くよどみて光る玉夢のちにも  
 さびしくひかる  
 秋かせの信濃しなのに居りてあを海の鷗をおもふ寂  
 しきかなや  
 わがいのち闇のそこひに濡れ濡れて螢のごと  
 く匂ふかなしき

投げやれ投げやれみな一切を投げ出せ旅人の  
 身に前後ぜんごあらずな  
 あざれたるわれの昨日の生活あきけの眼にこそうつ  
 れ秋草に寝る  
 酒嗅げば一縷ひとの青きかなしみへわがたましひ  
 のひた走りゆく  
 秋かせの都の灯あかりかげ落ちあひて酒や酌むらむ  
 かの挽歌ばんか等は（友をおもふ）  
 こほろぎの入りつる穴にさしよせし野にまろ  
 び寝の顔のさびしさ

さらばいざさきへいそがむ旅人は裾野の秋の  
 草枯れてきぬ  
 山麓の古驛の裏をながれたる薄にごり河の岸  
 はなつかし  
 火の山のいただきちかき森林を過ぎらむとし  
 てこころいたためり  
 雲去れば雲のあとよりうすうすと煙たちのぼ  
 る淺間わが越ゆ  
 火の山の老樹の縦のくろがねの幹をたたけば  
 葉の落ち來る

火の山の焼石原のけむりのかげ西ひがしさし  
 別るる旅人  
 風立てばさとくづれ落ち山を這ふ火山の煙い  
 たましきかな  
 見よ旅人秋のすゑなる山々のいただき白く雪  
 つもり來ぬ  
 眼をとめて暮れゆく山に對ふ時しみじみと身  
 のあはれなりけり  
 あの男死なばおもしろからむぞと旅なるわれ  
 を友の待つらむ

背せなのいろ落葉にまがひ蜥蜴の子おち葉のなか  
 を行く音寂ねしも  
 尺あまり延びし稚松こまつに松かさの實れり秋の山  
 の明るさ  
 風止みぬ伐りのこされし幾もとの松の木の間  
 の黄なる秋の日  
 惶おそしき旅人りじんのころ去りあへず秋の林に来て  
 坐れども  
 秋の森ふと出であひし溪間より見れば淺間に  
 煙断えて居り

溪あひの路はかなしく白樺の白き木立にきは  
 まりにけり  
 忘却はつきりのかげかさびしきいちにんの人あり旅を  
 ながれ渡れる  
 斯くばかり縮み終れるものなればこの命また  
 いつか延ぶらむ  
 眼は濁る腹いつばいに呼吸いきづかむうらやすに  
 さへ逢ふ日知らねば  
 蟲けらの這ふよりもなほさびしけれ旅は三月みづき  
 をこえなむとする

終りなき旅と告げなばわがむねのさびしきな  
 にと泣き濡るるらむ  
 はつとしてわれに返れば満目の冬草山をわが  
 歩み居り  
 冬枯の黄なる草山ひとりゆくうしろ姿を見む  
 ひともなし  
 嶺の草わがよこたはるかたはらに秋の淡雪  
 えのこり居り  
 かかる時ふところ鏡戀しけれ葉の散る木の間  
 わが顔を見む

蒼空ゆ降り来てやがて去り行きぬ山邊の雲も  
 あはれなるかな  
 いただきの秋の深雪に足あとをつけつつ山を  
 越ゆるさびしさ  
 冬草山鳥の立つにもあめつちのくづれしごと  
 き驚きをする  
 ものおもひ断ゆれば黄なる落葉の峽のおくよ  
 り水のきこゆる  
 秋の日の空をながるる火の山のけむりのする  
 にいのちかけけれ

日は暗く浮きあぶらなしわが命ただよふかた  
 に火の山の見ゆ  
 わがごとくさびしきころいつの代に誰がう  
 づめけむ山に煙見ゆ  
 火の山のけむりのするゑにわがころほのかに  
 青き花とひらくも  
 火の山を越えてふもとの森なかの温泉に入れ  
 ば月の照りたる  
 火の山のけむりのかげの温泉に一夜ねむりて  
 去りし旅人

湯あがりをしてひとりし居ればわが肌の旅をかな  
 しむ匂ひこもれり  
 なつかしやわがさびしさにさしそひて秋のあ  
 は雪ふりそめにけり  
 あはれなる女ひとりが住むゆゑにこの東京の  
 さびしきことかな (以下歸京して)  
 人知れず旅よりかへりわが友のめうとの家に  
 ねむる秋の夜  
 友が子のゆふべさびしき泣顔にならびても  
 をおもふ家かな



友のごとく日ごと疲れてかへり來むわが家と  
 いふが戀しくなりけり  
 終りたる旅を見かへるさびしさにさそはれて  
 また旅をしぞおもふ  
 われを見にくらき都會みやこのそこ此處に住み居る  
 友がみなつどひ來る  
 電燈のさびしきことよ旅路よりかへりて友が  
 顔を見る夜

旅の歌をはり

眼のまへのたばこの煙けむりの消ゆるときまたかな  
 しみは續かむとする  
 鏡より沈めるひとみわれを見る死しに對むかふごと  
 なつかしきかな  
 けふもまた獨りこもればゆふまぐれいつかさ  
 びしく點る電燈  
 賣り棄てし銀の時計をおもひ出づ木がらし赤  
 く照りかへす部屋  
 わがままは狂へる馬のすがたしきつかれて今  
 は横はるかな

思ひうみふところ手してわが行けば街のどよ  
 みは死の海に似る  
 ゆふぐれの風にしのびて匂ひ來ぬ隣家の庭の  
 落葉のけむり  
 かいかがみ路ばたの石手に取れば涙はつひに  
 頬にまろびいづ  
 歸るといふ世にいとほしきことのあり夜更け  
 てけふもとぼとぼ歸る  
 歩きつつひとり言いふはしたなき癖さへいつ  
 か身につつきしかな

街を行きこともなげなる家々のなりはひを見  
 て腫おびゆる  
 ひもすがら火鉢かこみてゆびさきは灰によご  
 れぬ庭に吹く風  
 雪ふれり暗きころの片かはにほのあかりさ  
 しものうきゆふべ  
 筆とめて地震の終るを待つ時のらんぷの前の  
 われの秋の夜  
 戀人の肺にしるべるやまひよりなつかしいか  
 な盃をとる

死をおもふかつて登りし火の山の足もとに見  
 し烟をおもふ  
 あざわらふ死の横顔にさそはれてわが片頬かたに  
 ものぼる冷笑れいせう

『あれ見給へ落葉木立の日あたりにすまひよげ  
 なる小ちひさき貸家かしゃ』

ゆふまぐれ袂たもとさぐれば先づこよひ淨瑠璃をき  
 く錢は残り  
 わが部屋へやに朝日さす間はなにごともし身にみなお  
 こりそ日向ひなたぼこする

日向ひなたぼこねむり入らむとするころのわが背の  
 かたに散りくる落葉  
 日向ひなたぼこ酒禁しゅんめられて衰へしわれの身體しんたいが日  
 に酔へるかな  
 日向ひなたぼこ出勤しゅつぎん前の友もまたわが背せまくらにう  
 とうととする  
 日向ひなたぼこ枕まくらもとなるうすいろの瓶びんのくすりに  
 日の匂においふかな  
 たべのこしし飯いつぶまけばうちつどふ雀すずめの子  
 らと日向ひなたぼこする

路ばたの枯葉ばやしの日あたりにくるわがへ  
 りのいつ寝入りけむ  
 つらかりしもののおもひでなつかしくなりゆ  
 くころもうらさびしけれ  
 蝙蝠に似むとわらへばわが暗きかほの蝙蝠に  
 見ゆるゆふぐれ  
 ただひとり離れて島に居るときこころ暫く  
 うごかぬゆふべ  
 ゆふまぐれ赤いんきもてわが歌をなほしてゐ  
 しが酒の飲みたや

ほんのりと酒の飲みたくなるころのたそがれ  
 がたの身のあぢきなさ  
 さきまでのいらいらしさのいつ消えてをんな  
 のそばに斯く坐るらむ  
 ややすこし遅れて湯より出るひとを待つ身か  
 なしき上草履かな  
 楨の葉のあをの葉すゑにつもる雪きゆるゆき  
 をば見てありしかな  
 湯あがりのひとにまちかく居ることの春はか  
 なしきひとつなるべし

白粉のあまきかをりも身にのらぬ湯あがりび  
 とをなにとすべけむ  
 湯あがりのかほとかほとが鏡のうへいたづら  
 をするかなしき眼をする  
 ちりやすきはなのほひにふとふれてなりぬ  
 かなしき空のつばめに  
 わがかほにうすきねいきのうつつなや灯の三  
 階のしたをゆく三味  
 あれを聴けまくらまくらにしとしととしたた  
 りてくるとほき三味線

かの友もこの友もみな白玉のこころ濁らずさ  
 びしきわれかな  
 獨りゐつひとつほしては一つ酌ぐさびしき酒  
 のわれのいのちか  
 見ればげに二十七なるわがつらと驚かむとて  
 わらふ白き齒  
 濠ばたの巢より乞食を追ひ立つるわかき巡査  
 のうしろかげかな  
 風のごとくあとさきもなき苦笑ひつらにうか  
 びぬ獨り坐るに

封切れば枯れし野菊とながからぬ手紙と落ち  
 ぬわが膝のうへ  
 狐にも巢ありといへりさびしきぞ林のおくの  
 眼にうつり来る  
 ひとりひとり親しきひとと離れゆくこのはか  
 なさの棄てがたきかな  
 松も見ゆしら梅も見ゆ或るころのさびしき安  
 房はをおもひ出づれば  
 梅やらむとわれをさがして來しひとと松のは  
 やしに行きあひしかな

梅つぼむころともなればいづくよりこのかな  
 しさは身にかへるらむ  
 ただ二日我慢してゐしこの酒のこのうまさ  
 と胸暗うなる  
 いづくまでわれをあはれむはて知らぬ汝なれがこ  
 ころは海かさびしや  
 暗く重きころをまたもたづさへて見知らぬ  
 街に巢をうつすかな  
 移り來て窓をひらけば三階のしたの古濠舟ゆ  
 きかよふ

ふうらりとふところ手して住み馴れぬ門を出  
 づるはうらさびしけれ  
 移り來て見なれぬ街路の床屋よりいづるゆふ  
 べのくびのつめたさ  
 漂泊のかたみに残すひげなれば斯くやははれ  
 に見えまさるらむ  
 星あをくながれて闇にかげひきぬわがふとこ  
 ろ手さむし街路ゆく  
 買ひきたりこよひかく着てぬる布團うりはな  
 つ日はまたいつならむ

日もひさしくわれにかかはりなきごとく思ひ  
 しかふと少女等を見る  
 さびしさのとけてながれてさかづきの酒とな  
 るころふりいでし雪  
 雪ふるにさけをおもひつ酒飲みぬひとりねむ  
 るはなにのさびしさ  
 雪ふれりと筆とりあげし消息につひ書きそへ  
 ぬかなしげのこと  
 ふる雪になんのかをりもなきものをこころな  
 にとてしかはさびしむ

雪ふればちらちらとさびしさがなまあた  
 たかく身をそそるかな  
 はつとしてこころ變れば蒼暗くそこひも見え  
 ず降るそらの雪  
 灯のともる雪のふる夜のひとり寝の枕がみこ  
 そなまめかしけれ  
 濠のはた獨りをとこがねる家ぞこころして漕  
 げした通ふ舟  
 水の上<sup>へ</sup>にふりきてきゆる雪の見ゆ酒のほひ  
 の身に残りつつ

知らぬ間に雨とかはりし夜のゆき酒のちな  
 る指のさびしさ  
 草の葉のほひなるらむいらとをんなこ  
 ひしくなりゆけるとき  
 かかる日は子供あつめに飴やの爺うたふ唄に  
 もなみださしぐむ  
 ともすればかなしき愛に陥<sup>ち</sup>ちむとすただゆき  
 ずりに見むとおもふに  
 一昔まへにすたれし流<sup>は</sup>行<sup>り</sup>唄<sup>うた</sup>くちにうかびぬ酒  
 のごとくに



虚無黨の一死刑囚死ぬきはにわれの『別離』を讀  
 みるしときく  
 がらす戸に白くみだれてふれる雪よりそひて  
 見れば寂しきものかな  
 わが袖にひとつふたつがきえのこる雪もさび  
 しや酒やにのぼる  
 身もおもく酒のかをりはあをあと部屋に満  
 ちたり酔はむぞ今夜  
 いざいざと友にさかづきすすめつつ泣かまほ  
 しかり酔はむぞ今夜

たまたまにただひとりして郊外にわが出で來  
 れば日の曇りたる  
 多摩川の浅き流れに石なげて遊べば濡るるわ  
 が袂かな  
 瀬もあさく藍もうすらに多摩川のながれてあ  
 りぬ憂しや二月は  
 多摩川の砂にたんぼぼ咲くころはわれにもお  
 もふひとのあれかし  
 曇日の川原の藪の白砂にあしあとなつて啼く  
 千鳥かな

川千鳥啼く音つづけば川さしの二月の山の眼  
 に痛み来る  
 山のかげ水見てあればさびしさがわれの身と  
 なりゆく水となり  
 山かげの小川の岸にのがれ来てさびしやひと  
 り石投げあそぶ  
 行くなかれかの人情のかなしきになれがいの  
 ちとなにと耐へむや  
 山の樹よ葉も散りはてて鳥も来すけふのわれ  
 にや似てやすからむ

石拾ひわがさびしさのことごとく乗りうつれ  
 とて空へ投げ上ぐ  
 友もうし誰とあそばむ明日もまた多摩の川原  
 に来てあそばなむ  
 水むすび石なげちらしたただひとり河とあそび  
 て泣きてかへりぬ  
 枝葉のみ眞暗くおもく打ち茂り根は枯るる樹  
 かこころさびしき  
 西吹かば山のけむりはけふもなほ君住む國の  
 そらへながれむ (答背山君歌四首)

なかぞらに山のけむりの断ゆる時けだしや君  
 も寂しかるべし  
 浅間山そのいただきゆ眺めたる君が下野は雲  
 ふかかりき  
 夜の牛乳飲みつつおもひふらふらと浅間の烟  
 に走るさびしさ  
 松おほき彼の鎌倉の古山に行かばや風のなか  
 に海見む  
 夜となれば瞳のおくのよろこびのさびしいか  
 なや薄く汗帯ぶ

常陸山負くるなかれとこころのうちいのるゆ  
 ふべは居る所無し  
 常陸山つひに負けたる消息は聞くにしのびず  
 われ歌咏まむ  
 山を抜く君がちからの衰へかなぎさ落ちゆく  
 汐のひびきか  
 わだつみの底の濁りか手をつかねものうき空  
 のもとに棲みたる  
 さびしさは蝶にかも似むこころにはつゆかか  
 はらず過ぐす朝夕

をりをりの夜のわが身にしのび入りさびしき  
 ことを見する夢あり  
 酒飲めば鼻よりうすく血の出づる身のおとろ  
 へをいかに嘆かむ  
 いまは早や生命いのちなるべき酒の香をうらさびし  
 くも戀ひわたるかな  
 いつとなくわれと身體をたのむこと薄らぎそ  
 めて在りぬ晝夜  
 よぼよぼとわれ慰めに行くわれの姿か徳利あ  
 また並べる

軒したは濁れる海邊手に持つは晝のくるわの  
 浅きさかづき  
 この家の軒のしたには舟も無し寄る波もなし  
 寂しき海かな  
 手をうちて踊れるわれのあはれさになほ手を  
 うちてしきりに踊る  
 かたはらにならぶ銚子の三つふたつ早やうら  
 さびしゑひそめしかな  
 汐さすやくるわの裏の濁り江に帆を垂れてゆ  
 くゆふぐれの船

岸ちかくゆたかに過ぐる大船に人聲もなしあ  
 をき灯ともる  
 ゆふぐれの水にうかべばこともなうさびしき  
 群ぞ沖の鷗は  
 かもめかもめ空に一羽が啼くときは水に入ら  
 むと身のかなしけれ  
 おそらくは舟人ならむ唄のよさはやひけすぎ  
 のひやかしの群  
 かたはらの女去りたるこころよさなみだのご  
 とき朝の酒かな

手まくらのあさきえにしも身にはしめまたの  
 夜逢はむうしやうつり香  
 ちひさなる舟にわが乗りふらふらと漕ぎいで  
 てゆく春の濁り江  
 街暗くかすめる裏の濁り江にい群れて啼かぬ  
 海の白鳥  
 濁り江はかすみて空もかき垂れぬわが居る舟  
 に啼き寄る鷗  
 枯草にわが寝て居ればそばちかく過ぎる子供  
 のなつかしきかな

かれ草のなかに散りたる檜の葉をひろはむと  
 して手のさびしけれ  
 われとべば犬も走りぬ目のかぎり薄日流れて  
 かなしき野邊に  
 悲しめるあるじ離れて目もとほく野末を走る  
 愛犬のあり  
 鐵砲の彈たまのごとくに野を走るわが愛犬を見る  
 もさびしき  
 枯草にわが寝て居ればあそばむと来て顔のぞ  
 き眼をのぞく犬

ゆふまぐれ遊びつかれてあゆみ寄る犬と瞳の  
 ひたと合ひたる  
 うす曇りなまあたたかき冬の日に犬とあそぶ  
 はかなしきことぞ  
 ましぐらにわれを馳け抜き立ちどまり振返る  
 犬の眼を打擲ちやくす  
 かなしきは愛のすがたか口笛にとほく野すゑ  
 を馳はせ來る犬  
 膝にゐて深き毛を垂れ檜の葉に夕日散るとき  
 わが小犬鳴く

指に觸るるその毛はすべて言葉なりさびしき  
 犬よかなしきゆふべよ  
 杉の樹をつと離れたる夕風のなかの鳥の大い  
 なるかな  
 一本の杉の木の根に起きかへるわがかげ長し  
 野は薄日かな  
 若き日をささげ盡して嘆きしはこのありなし  
 の戀なりしかな  
 秋に入る空をほたるのゆくごとくさびしやひ  
 との忘れぬかな

はじめより苦しきことに盡きたりし戀もいつ  
 しか終らむとする  
 おもかげの移るなかれとひとのうへにいのり  
 しことは全くあれども  
 五年にあまるわれらがかたらひのなかの幾日  
 をよろこびとせむ  
 一日だにひとつ家にはえも住まず得忘れもせ  
 ず心くさりぬ  
 わがために光ほろびしあはれなるいのちをお  
 もふ日の來ずもがな

ほそほそと萌えいでて花ももたざりきこのひ  
 ともとの名も知らぬ草  
 わびしさやふとわが立てる足もとの二月の地  
 を見て歩み出づ  
 石油せきゆをつぐ音きこゆ二階より藪やぶごしに見るち  
 ひさき家に  
 藪やぶかく窓のもとよりうちつづく友が二階の  
 二月の月の夜  
 ふつとして多摩の川原のなつかしく金を借り  
 来て一夜ひとよ寝に行く

砂のなかに顔をうづめて身をもだえ泣くごと  
 くして去りぬ川原を  
 かへるさは時雨となりぬ多摩川の川邊の宿しゆくに  
 一夜ひとよ寝しまに  
 わが顔に觸れて犬あり枯くさの日向にいねて  
 もの思ふとき  
 杉の木の間まものおもふわが顔のまへ木漏日の  
 かげに坐りたる犬  
 まさむねの一合瓶いちがふびんのかはゆさは珠にかも似む  
 飲まで居るべし



誰にもあれ人見まほしきところならむけふも  
 ふらふら街出で歩く  
 わが部屋にわれを待つべく一樽に酒は断たね  
 どされどさびしき  
 其處此處の友はいましも何をしてなに思ふな  
 らむわれ早も寝む  
 わが部屋にわれの居ること木の枝に魚の棲む  
 よりうらさびしけれ  
 三階の玻璃窓つつみ煤烟のほへるなかにひ  
 とり酒煮る

芝居見て泣けるなみだをひと知れずぬぐはむ  
 として身をはかなみぬ  
 平士間のほりにまみれわがなみだ頬をなが  
 るるわびしいかなや  
 かなしみにこころもたゆく身もたゆく酒もも  
 のうし泣きぬれてゐむ  
 うち見やる舞臺のほかのさびしさにつまされ  
 てこそぬぐへ涙を  
 しくしくとまたもなみだの眼ににじむこの劇  
 場のはなれともなや

そこはかと深山みやまの松葉まつばちることか寝ざめのこ  
 ころ寄るところなし  
 わだつみの底にあを石ゆるるよりさびしから  
 すやわれの寢覺は  
 明けがたの床に寝ざめてわれと身の呼吸いきする  
 ことのいかにさびしき  
 寝ざむればうすく眼に見ゆわがいのち終らむ  
 とするきはの明るさ  
 眼のさめてしづかに頭かしらもたげつつまたいねむ  
 とす窓に星見ゆ

夜ふかく濠うらにながるる落し水聞くことなかれ  
 寢覺むるなかれ  
 先づ啼くは濁る濠邊の鶴いたたきの青き朝を寝ざ  
 めてあれば  
 かなしくもいのちの暗さきはまらばみづから  
 死なむ砒素いしそをわが持つ  
 遠海のひびくに似たるなつかしさわが眼のま  
 への砒素いしそに集る  
 一つぶの雪にかも似む毒薬の砒素いしそぞ掌てに在り  
 あめつちの隅

ながめそ腐るいのちを恐ろしみなつかしく  
 こそ砒素をわが持て  
 死にてのちさむく冷ゆれど顔のさま變らずと  
 いふ砒素はなつかし  
 まなこ閉ぢ口をつぐめるさびしさに得耐へず  
 ついと立てど甲斐なし  
 ふるさとの美々津の川のみなかみにひとりし  
 母の病みたまふとぞ  
 さくら早や背戸の山邊に散りゆきしかの納戸  
 にや臥したまふらむ

病む母よかはりはてたる汝が兒を枕にちかく  
 見むと思ふな  
 病む母のまくらにつどひ泣きぬれて姉もいか  
 にかわれを恨まむ  
 病む母を眼とちおもへばかたはらのゆふべの  
 膳に酒の匂へる  
 病む母をなぐさめかねつあけくれの庭や掃く  
 らむふるさとの父  
 葉をすべる露のごとくなげやりのこころと  
 なりて行くは何處ぞ

終に身を酒にそこなひふるさとへ歸るか春の  
 さびしかるらむ(友へ)  
 わが暗きところを海に投げ入れむ沈みて巖と  
 なりて苔生ひむ  
 あめつちに獨り生きてるゆたかなる心となり  
 て擧ぐるさかづき  
 指さきにちさき杯もてるときどよめきゆらぐ  
 暗きころよ  
 なにとせむすこし酔ひたる足もとのわが踏む  
 地よりかなしみは湧く

いまは早やとらへ難かり蒼暗き空に離れてわ  
 れの悲しむ  
 眼も鈍くころくもればおのづから眉さへ重  
 し春の街見ゆ  
 雪消えてけふもけむりの立つならむ淺間よ春  
 のそらのかたへに  
 あは雪のとけてながれむ火の山のかの松原に  
 行きて死にたや  
 静かなりし日にかへらむとこころより思へる  
 ごとしわれのよこ顔

をりをりは見えすなれどもいつかまた巢にか  
 へり居り軒の蜘蛛の子  
 わが部屋に生けるはさびし軒の蜘蛛屋根の小  
 ねすみもの言はぬわれ  
 誰ぞひとりほほゑめばみないちやうに酒をし  
 ぞ思ふ部屋のゆふぐれ  
 大君の城の五月ぐわつの森林にゆふさりくればとも  
 る電燈  
 河を見にひとり来て立つ木のかげにほのかに  
 晝を啼く蛙かはづあり（以下十三首下總稻毛にて）

いつのまに摘みし菜たねぞゆびさきに黄なる  
 ひともと持てる物思おもひ  
 かくばかり清きころぞあざむくになにの難  
 さと笑みて爲しにけむ  
 眼とづるはさびしきくせぞおほぞらに雲雀啼  
 く日を草につくばひ  
 根のかたにちさく坐れば老松の幹よりおもく  
 風降り来る  
 海光る松の木の間まの白砂をあゆむもさびし坐  
 らむも憂し

かなしさに閉ぢしまぶたの瞼毛にも来てやど  
 りたる松の風かな  
 耐へがたくまなこ閉づればわが暗きこころ梢  
 に松風となる  
 波もなき海邊の砂にわが居れば空の黄ばみて  
 春の月出づ  
 なぎさ邊の藻草昆布のむらがりなつかしい  
 かな春の月出づ  
 眼も開かず砂につくばひ夕風の松の木の間  
 わがひとり居る

しら砂にかほをうづめてわれ禱るかなしさに  
 身をやぶるまじいぞ  
 このこころ慰むべくばあめつちにまたなにも  
 のの代ふるあらむや  
 なにはなく天あま死にせむとおもひるし彼はまこと  
 にけふ死ににけり  
 思ふとなく思はることさびしけれさもなき  
 友の死ににゆきしとぞ  
 よべもまた睡られざりき初夏の午前の街に帽  
 かむり出づ

酒を見てよるこぶわれのよこ顔をながめて居  
ればさしぐみ來る  
衣ぬげば五月ごくらの松のこずるより日あをく流れ  
肌はだに匂におへる  
松脂しょうじの匂におひかわれの寂さびしめるいのちのはしか  
一ひとすぢとなる  
森出もりだでてあをき五月の太陽たいやうを見上みあぐる額ぬかのな  
にぞ重おもきや  
かたはらの地つちを見詰みづめて松の根ねにわれの五月  
をさびしがるかな

松の葉はのしげみにあかく入いりさし松まつかさに似  
て啼なげる山雀やまがら  
こまやかに松まつの落葉らくえつの散ちりばへるつちより蟬せみ  
の子この這はひ出でづる  
ゆく春はるのゆふ日にうかみあかあかとさびしく  
松まつの幹みならぶかな  
わが肌はだの匂におふも肌はだのうへを這はふ蟻あひのあゆみも  
さびしき五月ごくら  
松まつの葉はの散ちりしく森もりにいぬるとてわが手枕たまくらの  
いたむ晝ひるかな

松の根の落葉にいねてものを思ふ夏の背廣の  
 紺の匂ひよ  
 松ばやしわが寝て居ればひらひらと啼いて燕  
 がまひ過ぎしかな  
 あなあはれいつかとなりの櫓の葉に這ひもう  
 つれる蓑蟲の子よ  
 松やにのあをき匂ひの血となりてわが身やめ  
 ぐる森の午後の日  
 草わけて雲雀の巢をばさがすとてわれの素足  
 のいたむ晝かな

美しく縞のある蚊の肌に来てわが血を吸ふも  
 さびしや五月ごごち  
 日も青きすすきの原に蟲を喙くちばしみつばくらあま  
 た群れあそぶかな  
 松の花うすく匂ふにさそはれてわが鬱憂うらやまの浮  
 き出でむとす  
 おほいなるむらさきの桐手に持てばわが世む  
 らさきに見ゆる皐月野さつき  
 わかやかに立てるすすきにふと觸れし小指ゆびの  
 切れて血のしみいづる



下總の國に入日し榛はらのなかの古橋わが渡  
 るかな（以下下總市川にて）  
 はり原やものおもひ行けばわが額のうすく青  
 みて五月ごぐわつけぶれる  
 あを草のかげに五月の地のうるみ健かなれと  
 われに眼を寄す  
 ただひとり杉菜のふしをつぐことのおそびを  
 ぞする河のほとりには  
 藪すすめ群るる田なかの停車場にけふも出で  
 来て汽車を見送る

しろき花散りつくしたる下總の梨の名所のあ  
 さき夏かな  
 袖ひろき宿屋の寝ね衣着まきつつ見るアカシアの花  
 はかなしかりけり  
 あめつちの青くけぶれる河の邊の葭原に巢を  
 まもる葭よし切き鳥り  
 身を寄せし草のしげみのふかければこころや  
 すくも物やおもはむ  
 ゆく春の草はらに來てうれひつつ露ともなら  
 ぬわがいのちかな

あを草の野邊をかへればわが影のいつしか月  
 となりにけるかな  
 町の裏川かは蒸気船じょうきせんより降り立てば花火をあげて  
 子供あそべり  
 榛はりはらのあをくけぶれる下總しもすまに水田うつ身は  
 さびしからまし  
 ありなしの貧ひんしき戀こひにかなればわが泣なくこ  
 との斯ごとくも繁しげなる

死か藝術か

## 本書の初めに

本書には昨年の秋に出版した「路上」以後の作を収めた。昨年九月から本年七月まで、即ち我が忘れ難い明治年號の最終一年間に成つた歌である。

明治四十五年七月二十一日に惶しく原稿をまとめて書肆に渡し、翌二十二日に私は東京を去つてこの郷里に歸つて來た。父危篤の急電に接したがためであつた。それで、本書の體裁などもあらましのことを相談しておいたきり、あとは校正まで東雲堂の西村辰五郎君を煩はした。原稿は自身で認めた。配列の順序は例によつて歌の出來た時の順序に従うた。一首々々の上はまだ鮮かな記憶が存してゐる。

「昨年の春出版した『別離』以後の作約五百首をあつめてこの一冊を編んだ、昨一年間に於ける我が生活の陰影である。透徹せざる著者の生きやうは、その陰影の上に同じく痛ましき動搖と朦朧とを投げて居る。あてのない悔恨は、これら自身の作品に對する時、ことに烈しく著者の心を刺す。我等、眞に生きざる可からざるをまた繰返して思ふ。」と「路上」の初めに書いて居る。その悔恨と苦痛とをばそのまゝ、また本書の上にも推し及ぼさなくてはならぬことを心から悲しく思ふ。

ことに、これから數年間、この零落し果てた山おくの家、にこのまゝ留つて、憐れな老父母を見送らうと決心した今日、いま、で我がまゝを極めてゐた自身の生活を見返る時、更に多少の感慨の動くを禁じ得ないのである。この「死か藝術か」を界にして、私の生活はどう移つて行くであらう。

これからの我が背景を成すべきこの郷里は山と山との峽間五六里の間に涉つて戸數僅かに三百に満たぬ村である。其處から一步も出ることなしに暮して行くつもりで居る。

一昨夜來の大雨で、我が家のすぐ下の溪は一丈餘も水が増した。溪から直ぐ削つたやうに聳え立つた向ふの山の腹には矢張りこの雨のために急に三つ四つの眞白な小さな瀧が懸つた。峯には深い雲が白く濺んで居る。

この頃漸くこの二階の部屋まで上つて來られるやうになつた父は、この小さな瀧の一つを指して、あの小市瀧にあの位の水が落ちるやうになつたから、もうこの雨もあがる、と獨りごとのやうに私の側で言つて居る。

明治大帝御葬儀の話、乃木將軍殉死の噂も何だかよその

世界に起つたことのやうに遠くく耳に響く。實際この村に於てはそれらの事よりこの雨で栗が何升餘計に拾へたと、積んでおいた材木が何本流れたことの方が遙かに重大な事件であるのだ。

大正元年九月十八日、

日向の國尾鈴山の北麓にて

若山牧水

手術刀

蒼ざめし額つめたく濡れわたり月夜の夏の街  
を我が行く  
あるかなき思ひにすがりさびしめる深夜よふけのわ  
れと青夏虫と  
わが家に三いろふたいろ咲きたりし夏くさの  
花も散り終りけり  
かなしくも痛みそめたるものおもひ守りて一ひと  
日ひもの喰べず居り

野にひとり我が居るゆるかこのゆふべ木々の  
 さびしく見えわたるかな  
 根を絶えて浮草のはなうすいろに咲けるを摘  
 めばなみだ落ちぬれ  
 栗刈れるとほき姿のさびしきにむかひて岡に  
 あを草を籍く  
 獨り居ればほのかに地のにほふなり衣服ぬぎ  
 すてて森に寝ねて居む  
 おほいなる青の朴ほの葉ひと葉持ち林出づれば  
 わが身さびしも

いかに悲しく秋の木の葉の散ることぞ髪さへ  
 痛めいのち守らむ  
 わが痛めるいのちの端に觸れ觸れて秋の木の  
 葉の散りそめにけり  
 なにに然かおびゆるものぞ我がいのち身をか  
 ためたるすがた寂しも  
 いづくやらむこころのすみのもの思ふかたち  
 は見ゆれ痛むこもなし  
 かもめかもめ青海を行く一羽の鳥そのすがた  
 おもひ吸ふ煙草かな

わが手より松の小枝にとびうつる猫のすがた  
 のさびしきたそがれ  
 ただひとつ風にうかびてわが庭に秋の蜻蛉あきつの  
 ながれ來にけり  
 しのびかに遊女が飼へるすす蟲を殺してひと  
 りかへる朝明け  
 地にかへる落葉のごとくねむりたるかなしき  
 床に朝の月さす  
 鬱々とくるわより歸りひとを見ず朝の林に葉  
 をわけて入る

わが髪にまみれて蟻の這ふことも林は秋のう  
 らさびしけれ  
 あたたかき身のうつり香を悪わるみつつ秋の青草  
 噛めば苦かり  
 秋花の莖を噛み切る齒のさきのつめたさよ朝  
 のこのうつり香よ  
 秋の市街しちがしづかに赤く日を浴びぬやがてなつ  
 かしきわが夜は來む  
 高窓の赤き夕日に照らされて夜を待つわれら  
 秋の夜を待つ

秋の街にゆふべ灯かげのともることいかなれ  
 ば斯く身にし沁むらむ  
 なにやらむ思ひあがりて眼も見えず秋の入日  
 の街をいそぎぬ  
 酒無しにけふは暮るるか二階よりあふげば空  
 を行く鳥あり  
 螢のごとわが感情のふわふわと移るすがたが  
 ふつと眼に見ゆ  
 我がうしろ影ひくごとし街を過ぎひとり入り  
 ゆく秋植物園

植物園の秋の落葉のわびしさよめづらしくわ  
 が静かなること  
 ふるさとの南の國の植物が見ゆるぞよ秋の温  
 室の戸に  
 うなだれて歩むまじいぞ櫻落葉うす日にひか  
 りはらはらと散る  
 あちきなく家路のかたへ向きかふる夜霧の街  
 のわがすがたかな  
 其處に在り彼處にみえしわがすがたさびしや  
 夜の街に霧降る



ねがひしはこの静けさか今朝のわがこころの  
 すがた落葉に似たり  
 秋かせや日本やまとの國の稻の穂の酒のあぢはひ日  
 にまさり來れ  
 心のうへ狭霧せきぎりみな散れあきらかに秋の日光ひかりに  
 親しましめよ  
 眼をあげよもの思ふなかれ秋ぞ立ついざみづ  
 からを新しくせよ  
 それ見よさびしき膝の濡るるものさかづきを  
 手になにを思ふぞ

見も知らぬをんなのそばにひと夜來てねむら  
 むとするこころの明るみ  
 友を見てかなしきこころ潮うしほきたる見まはせ  
 ど酒に代ふるものもなき  
 あはれまこと雨にありけりまたしても降るか  
 さきほど星の見えしに  
 動物園のけものの匂ひするなかを歩むわが背  
 の秋の日かげよ  
 身も世もなく見をかはやがる親猿の眞赤きつ  
 らに石投げつけむ

秋の入目猿がわらへばわれ笑ふとなりの知らぬ人もわらへる  
 秋の日の動物園を去らむとしかるき眩暈めまいをおぼえぬるかな  
 はつとして歩みをとどめなにやらむ拂ふがごとく癖ぞ袖振る  
 停車場に入りゆくときの静かなるこころよ眼にうつる人のなつかし  
 好むとなき煙草を手づから買ふことがうれしくもあり停車場の店に

袂よりたばこ取うでて火をつくるときのころをなつかしと思ふ  
 わびしやなまたも夜つゆの軒したにかへりて雨戸たたかねばならず  
 歸りきてまちを手さぐり灯をともすその灯をともすうれしや獨り  
 眼の見えぬ夜の蠅ひとつわがそばにつきゐて離れず恐しくなりぬ  
 ひとり寝の夜のねまきにかふるとてほそき帯をばわが結ぶかな

ひとりねの枕にひたひ押しあてていのりに似  
 たるよろこびを覺ゆ  
 わが寝ざめころかなしくかきくもりいため  
 る蔭にこほろぎの啼く  
 常盤樹の蔭には行かじ秋の地のその樹のかけ  
 のなにぞ憎きや  
 眼馴れたるこの樹四時に落葉せず黒き實ぞな  
 る秋風立てば  
 かなしくも我を忘れてよろこぶや見よ野分こ  
 そ樹に流れたれ

いつとなく秋のすがたにうつりゆく野の樹々  
 を見よ静かなれころ  
 飛べば蜻蛉のかけもさやかに地に落つ秋は生  
 くこと悲しかりける  
 秋の地に花咲くことはなにももの虚偽ぞこと  
 ごとく踏み葬るべし  
 なに恨むこころぞ夕日血のごとしわが眼すさ  
 まじく野の秋を見る  
 手を切れ、双脚を切れ、野のつちに投げ棄て  
 ておけ、秋と親しまむ

秋となり萩はな咲けばおどろきてさしぐむこ  
 ころ見るにしのびず  
 われとわが指吸おゆびひつつ身もほそく秋に親しむ  
 野の獨りかな  
 草原は夕陽深し帽ぬげば髪にも青きいなご飛  
 びきたる  
 歩きながら喰はむと買ひし梨ひとつ手に持ち  
 ながら入りぬ林に  
 眺め居ればわが眼はつちとなりにけり秋の木  
 の影落ちたる地つちに

黒き蟲くろき畑のつちのかげに晝啼いて居り  
 ほそくないて居り  
 森よさらば街へいそがむくろ髪のかなびける床  
 をおもふに耐へねば  
 見てあればこころ痛みてたへがたし深夜よふけあや  
 しき汝ながすがたかな  
 くれなるのりぼんをつけて夜の挨拶する子を  
 見れば悲しとぞおもふ  
 晝は野の青き日に觸れ夜は燃ゆるひとの身に  
 ふれ秋は悲しき